

学習アドバイス - 日本史

■ 全学統一入試（2月3日）

出題傾向

大問数4題、小問数40問（各大問10問）、解答形式は全て4択のマークシート方式が採用されている。解答時間は60分。大問別の出題内容は以下の通りである。

- 1 原始・古代・中世の政治・外交・文化・経済に関する雑題
- 2 近世（江戸時代）の文化史・経済史
- 3 近代（明治時代）の政治史
- 4 近現代（大正時代～戦後）の政治史・外交史

問題の難易度は、標準レベル。小問数40問のうち、正誤文判定問題が10問（昨年度と同数）であり、そのうち史料の内容を問う問題が2問あった。また、組み合わせ問題が5問（昨年度と同数）であった。その他は事件、人物、作品などの用語を問う問題となっている。なお、昨年度出題された年代順並べ替え問題は見られなかった。史料問題は、1問5（「尾張国郡司百姓等解」）、1問8（「二条河原落書」）、1問10（「加賀の一向一揆」）、3問3（「王政復古の号令」）、3問(B)リード文（「民撰議院設立の建白」）が出題されている。出題範囲は、近世（江戸時代）から近現代（明治時代～戦後）が中心であり、原始時代～中世の出題は比較的少なかった。出題内容は、政治史・外交史・文化史・経済史の各分野からバランスよく出題されている。なかでも政治史や外交史からの出題が中心となっているが、文化史や経済史からの出題も一定数見られるので対策が必要である。

■ 一般入試（2月7日）

出題傾向

大問数4題、小問数40問（各大問10問）、解答形式は全て4択のマークシート方式が採用されている。解答時間は60分。大問別の出題内容は以下の通りである。

- 1 古代～中世（平安時代・室町時代）の政治史・外交史・文化史・経済史
- 2 中世～近世（戦国時代～江戸時代）の政治史・外交史
- 3 近世～近代（幕末～明治時代）の政治史・外交史・文化史
- 4 近代（明治時代）の政治史・外交史・文化史

問題の難易度は、標準レベル。小問数40問のうち、正誤文判定問題が6問（昨年度より5問減少）であり、そのうち適切な文章の数を選ぶ問題が1問あった。また、組み合わせ問題が12問（昨年度より9問増加）であった。その他は事件、人物、作品などの用語を問う問題となっている。なお、史料問題や年代順並べ替え問題は見られなかった。出題範囲は、近世（江戸時代）から近代（明治時代）が中心であり、古代～中世の出題は比較的少なかった。また、原始時代や戦後からの出題は見られなかった。出題内容は、政治史・外交史・文化史・経済史の各分野からバランスよく出題されている。なかでも政治史や外交史からの出題が中心となっているが、文化史や経済史からの出題も一定数見られるので対策が必要である。

■ 一般入試（2月8日）

出題傾向

大問数4題、小問数39問（大問1のみ9問、他の大問は10問）、解答形式は全て4択のマークシート方式が採用されている。解答時間は60分。大問別の出題内容は以下の通りである。

- 1 中世（鎌倉時代～室町時代）の政治史・外交史・文化史・経済史
- 2 近世（安土桃山時代～江戸時代）の政治・外交・文化・経済に関する雑題
- 3 近代（明治時代）の政治史・文化史・経済史
- 4 近代（明治時代）の政治史・外交史・文化史

問題の難易度は、標準レベル。小問数 39 問のうち、正誤文判定問題が 5 問（昨年度より 2 問減少）であり、そのうち適切な文章の数を選ぶ問題が 1 問あった。また、組み合わせ問題が 10 問（昨年度より 3 問減少）、年代順並べ替え問題が 2 問（昨年度は出題なし）であった。その他は事件、人物、作品などの用語を問う問題となっている。なお、史料問題は見られなかった。出題範囲は、中世～近世（鎌倉時代～江戸時代）と近代（明治時代）が、ほぼ半々であった。また、原始時代～古代、現代からの出題は見られなかった。出題内容は、政治史・外交史・文化史・経済史の各分野からバランスよく出題されている。なかでも政治史や外交史からの出題が中心となっているが、文化史や経済史からの出題も一定数見られるので対策が必要である。

学習アドバイス（全学統一入試 2 月 3 日、一般入試 2 月 7 日、2 月 8 日 共通）

本学では、すべての日程において大問数 4 題、小問数は原則として 40 問（今年度は一般入試 2 月 8 日のみ 39 問）という問題構成となっており、解答時間は 60 分である。出題形式は 4 択のマークシート方式が採用されている。また、出題範囲については、近世（江戸時代）～近代（明治時代）からの出題が大きなウェイトを占めており、原始・古代～中世、現代からの出題は比較的少ない傾向にある。問題の難易度はいずれの日程においても標準的であり、教科書レベルの知識が習得できていれば、ほとんどの問題に対応することが可能である。本学ではさまざまな形式の問題が出題されているが、以下、問題形式ごとに解き方や対策を簡単に述べていく。

■ 用語選択問題

設問中の過半数は、事件や出来事、人物や作品などを問う用語選択問題となっており、本学の日本史では最も出題数の多い問題形式となっている。ただし、問われている用語は基本的なものがほとんどであるため、教科書の太字の用語を中心にしっかりと整理し、市販の一問一答集などを利用して、即答できるように練習を積むことが有効な対策となる。また、本学では、文化史からの出題で、作者名や作品名を問う問題が多く見られるので、教科書に掲載されている太字の作者名や作品名については確実に押さえておこう。

■ 正誤文判定問題

正誤文判定問題は、各日程において 5～10 問程度出題されており、本学の日本史では一定数の出題が見られる問題形式となっている。正誤文判定問題では、「正文」ではなく「誤文」の選択肢を探すことがコツとなる。その際、各選択肢の文に目を通しながら、次の 3 点をチェックするようにしたい。(1)「時期」の不適合。「設問の時期設定と異なる時期の用語が含まれている」または「用語同士の時期にずれがある」のかを確認する。(2)「前後関係」の不適合。「用語同士の前後関係が正しい、または逆転している」のかを確認する。(3)「組み合わせ」の不適合。「用語同士の組み合わせ、関連付けが間違っている」のかを確認する。共通テストやセンター試験の過去問などで正誤判定形式の問題を解いていく際に、上記の方法で「誤文」を探すようにトレーニングを積んでいけば、正誤文判定問題には強くなるはずである。

■ 組み合わせ問題

組み合わせ問題は、各日程において 10 問前後出題されており、特に一般入試においては用語選択問題に次いで出題数の多い問題形式となっている。組み合わせ問題の多くは、二つの空欄を並べてそれぞれの用語を問うという形式なので、各空欄に入る用語を正確に覚え

ていれば正答は容易である。また、正誤文判定問題を解く際の考え方と同様に、組み合わせとなっている用語同士を比較して、時期や前後関係などがずれていないかという視点で正誤を判断することも大切である。なお、本学では、文化史からの出題で、作者名と作品名の組み合わせを問う問題が多く見られるので、教科書で太字の作品名については即座にその作者名が出てくるようにトレーニングを積んでほしい。

■ 年代順並べ替え問題

4 つもしくは 5 つの出来事を年代順に並べ替える問題は、昨年度は全学統一入試（2月3日）において3問出題されており、今年度は一般入試（2月8日）において2問出題されている。出題頻度は高くないが、難易度の高い問題形式なので注意が必要である。問題を解く際に各出来事の年号まで細かく覚えている必要はないが、出来事同士の前後関係を押さえていなければ間違えてしまう。同じ形式の問題を解いた際には、解説をよく読んで「Aという出来事が生じて、その結果Bという出来事が生じた」という因果関係を理解するように努めよう。また、普段の学習に際しても、歴史の流れの中で出来事同士を関連づけて考える習慣を身につけたい。なお、戦後史を学習する際には、「1950年代」、「1960年代」、「1970年代」…というように大まかに年代を区分して、その時期に起こった出来事をノートにまとめると前後関係がつかみやすいだろう。

■ 史料問題

史料文を用いた問題は、昨年度は全学統一入試（2月3日）大問⁴、一般入試（2月7日）大問²、一般入試（2月8日）大問³で出題されており、今年度も全学統一入試（2月3日）大問¹及び大問³で出題されている。用いられている史料文はいずれも教科書に掲載されているので、『詳説日本史史料集』（山川出版社）なども活用しつつ、有名な史料文に関しては日頃から目を通しておこう。一般的に、史料文の読解には古文の知識がある程度必要となるが、出典や史料文中の人名や出来事などのキーワード、また選択肢の内容に着目することで、何に関する史料かを類推することは可能である。そのうえで、その史料に関連する日本史の知識を総動員して正誤を判断することが大事である。

以上を踏まえて、それぞれの問題形式にしっかりと対応して正答を導いてもらいたい。冒頭に述べた通り、本学の日本史の問題は総じて教科書に準拠した内容である。そのため、普段から教科書をしっかりと読み込み、その内容を習得するという正攻法が高得点への近道であるといえる。ここまで読んで頂いた本学の出題傾向や学習アドバイスを指針としつつ、これから入試当日まで焦らず継続的に学習を進めてもらいたい。最後に、皆さんが本学の日本史を攻略して合格を勝ち取ることを祈っています。